

第1章 「パワーの無形化の到来」

§ ソ連崩壊の歴史的特異性

もし将来において20世紀の歴史が書かれるとしたとき、それがいかなる立場の人物によって書かれるものであるにせよ、1991年のソビエト連邦の崩壊という出来事が歴史的大事件としてそこに記載されることは間違いない。

一般に「歴史的事件」と呼ばれるものの中には、後世の歴史家によって初めて意義と生命を与えられ、当時の民衆にはその重要性が理解されずニュースであることさえ気づかれないものもあるが、この大事件の衝撃は同時代を生きる者にとっても十分すぎるほど大きなものだった。

それが衝撃的であったことの理由の一つは、ほんの三年ほど前にはそれが現実のものとなることを確信をもって予言する専門家がほとんどおらず、現実が常に予測を上回る速度で進行していったことである。そのためブラウン管に写る事件を常に解説つきで冷笑的に眺めることに慣れていた人々は、その退屈な予定調和が突然崩れて自分自身が歴史の中に投げ込まれ、まさしく当事者の立場で一つの大事件を目撃しているのだという感覚を味わうことになった。

しかしこの事件は、単に20世紀という一つの時代の中の事件であるにとどまらず、もっと大きな視点から見ても画期的意味をもつ事件だったと言える。つまりわれわれの世代は人類史上、巨大な帝国が1発の銃弾も放たれることなしに崩壊する様を目撃した最初の世代なのである。

歴史上、これまでもいくつもの帝国が崩壊してきたし、またその理由もいろいろであった。経済の破綻、官僚機構の肥大化、民族問題の爆発、異質な宗教の繁殖、新技術文明への乗り遅れ等々である。しかしそれらはすべてその帝国を倒そうとする槍の、いわば木の柄でしかなかったと言える。

今までの歴史ではそれらに軍事力という鉄の穂先がついた時、初めてその帝国を倒す力となった。実際ほとんどの場合、帝国の崩壊の瞬間には必ず武器を手にした挑戦者側の兵士たちが首都を駆け回り、その軍事力こそが帝国に最後のとどめを刺せるかどうかを決定してきたのである。その軍事力は、国力の弱体化に乗じて首都に雪崩れ込んできた外部のライバル国の軍隊である場合もあるし、あるいは国内体制の矛盾からくる不満によって内部で発生した革命軍である場合もあるが、とにかく前に述べたようなさまざまな原因は、それが何らかの形で軍事力の掌握に結びついた場合にのみ、実際に帝国を倒すことができた。それが結びつかない場合には、長期的にはともかくその場は一応しのいで存続することができるのである。

ソ連崩壊に際して、歴史によく通じた専門家ほどそれを予測し損ねたという皮肉な状況の最大の理由は恐らくそこにある。彼らはソ連を倒すことになる槍について、その木の柄が既に十分に成長していることをよく認識していた。そのため彼らは、鉄の穂先が完成するのはいつなのかということに注意を注ぐようになった。そして当時の状況を観察する限りでは、そこに穂先はまだ付いておらず、その完成は10年程度後のことだろうというの

が大方の予想だったのではないかと思われる。

ところが従来の歴史上の原則を無視するように、軍事力という鉄の穂先なしでソ連は崩壊してしまったのである。これは世界史を動かす力としての軍事力がその王座を降りたという点で、人類史上巨大な意味をもった事件だったと言える。

§ 核戦略と柔軟性の概念

それなら世界史を動かすパワーとしての軍事力というものはもはや無力化したというべきなのだろうか。なるほどソ連軍の数万両の戦車が、帝国の崩壊に際してほとんど何ものし得なかったという事実を見るならば、誰しもそう言いたくなるだろう。しかし私はその言い方は正確ではないと思う。私に言わせれば、その現象の本質をなすのはむしろ「通常兵器の相対的核兵器化」と呼ぶべきものではなかったかと思われる。

全面核戦争の危機が当面遠のいた現在、いわゆる学問としての「核戦略」の体系も一般には過去の遺物になったと考えられている。しかしたとえ核兵器そのものが地上から姿を消す日が来たとしても、その理論体系の中で誕生した概念のいくつかについては、その子孫は姿を変えて別の場所で生き続けるように思われる。そこで復習の意味も兼ねて、それについて少し述べることにしよう。

かつて米ソ超大国がにらみ合っていた時代に、双方が抱える核ミサイルの卒倒せんばかりの数量を聞かされた時、一般市民にとってはそれだけでも十分に狂気と見えたが、双方の国防省が核ミサイルだけでは満足せずに、本来前時代の花形兵器であったはずの戦車や戦闘機までわざわざニューモデルを開発して配備しようとしている様を見て、多くの人々は、これはもう政府の人間は完全に頭が狂ってしまったのではないかと考えていた。

核ミサイルのダモクレスの剣の下で暮らす破目に陥ったことについては、狂気は狂気としてもそれなりに理解できる部分があった。何と言っても人類は核兵器の作り方をすでに知ってしまったのであり、ひとたび魔神が瓶から外へ出てしまった以上は魔神の論理に従う他にないことは常識でも明らかだったからである。

しかしもはや誰が見ても旧時代の兵器になったはずの戦車や戦闘機のために巨額の国防予算を割くとなると話は違ってくる。現代の戦争が核ミサイルの撃ち合いになることは誰の目にも分かりきっており、そんなものを配備したところで、せいぜい死の灰の中をがたがた空しい音を響かせてぶざまに動き回ることしかできないはずである。それなのに一体全体何だって今さら戦車や戦闘機を持つ必要があるというのだろうか？

これは素朴であるとはいえ、実にもっともな疑問である。実際に冷戦初期においては政府や軍の中にもそう考える人々があつた。つまり核爆弾を搭載した爆撃機さえ保有しておれば国防はそれで十分だという考えである。それだけの報復力の存在を目にし、大量の核兵器が頭上に降ってくる危険を冒してまで侵略を企てる国などあるはずもなく、戦車など保有しなくとも国境は守れるはずだというわけで、この考えを延長した戦略思想は50年代に「大量報復戦略」の名で実際に採用されていたのである。ところが現実の世界に核兵器というものが置かれてみると、事はそう簡単ではないということがだんだん判明した。

例えば今ここに、部屋の中で下半身不随の男が拳銃を持って椅子に座っているとしよう。

ここに突如窓ガラスを破って強盗が飛び込んできて、ナイフを構えて彼を殺そうと突進してきたならばどうなるだろうか。彼は椅子から一步も動けず、したがって逃げることもできないが、その場で椅子に座ったまま迷わず拳銃の引き金を引きさえすれば、彼は自分の身を守ることができる。また実際に発射せずとも、銃口を強盗に向けて、それ以上近づくなと警告することもできるだろう。

ところがこれが武器をもたない凶々しい泥棒相手となると少し話が違って来る。もし窓から悠々と入ってきたこの泥棒が、椅子から3mほど先に落ちているコインを拾おうとしたならば、それをこの拳銃を使って阻止できるだろうか。それは恐らく不可能だろう。

なぜなら、椅子の上から拳銃を構えて脅しをかけたとしても、たかがコイン一枚のために拳銃で人を射殺するはずがないことは双方が知っており、そのためこの泥棒はにやにや笑いながらコインをポケットに入れて立ち去ってしまうことは明らかである。強盗を阻止する力をもっていた拳銃には、実はコソ泥を阻止する力はなく、後者の阻止には警棒だの投げ縄だのが結局は必要になってしまうのである。

核戦略家たちが直面したのも実はこれと同様の問題だった。確かに数千両の戦車の大集団が突如国境線を越えて無防備の国内に雪崩れ込んできた場合には、核兵器を使用するとの脅しをかけることもできるだろうし、あるいは本気で使うということもあり得るかもしれない。しかしせいぜい10両程度の戦車がやはり無防備の国内に侵入してきたとき、それを核の脅しで追い出すなどということが一体できるものなのか？

逆の立場から言えばこういうことになる。仮に相手国が強大な核兵器を保有するが他の武器は一切もたず、その国防を核兵器だけに依存しているとしよう。こういう相手を攻めるにはどうすれば良いだろうか。この場合、こちらは手持ちの戦力をどんどん小さく分割していった次第に小さくソフトな浸透力をもつものにしていけば、いつか必ず相手側がボタンを押すのをためらうレベル以下に達することだろう。そうなれば相手側にはもはやその浸透を阻止する手段がなくなってしまうことになる。

これを見てもわかるように、以前の軍事戦略においては、いかに威力のあるエネルギーを集中して相手にぶつけるかが競われたが、核時代の戦略においてはまったく逆に、いかにしてこちらの力を弱くして浸透させるかという「柔軟性」が競われているのである。

こうした双方の思惑が結局、核ミサイルの時代に一見時代錯誤的とも見える戦車等の配備を行わせたわけである。核兵器は確かに威力はあるが、逆に言えばオール・オア・ナッシング的な硬直した対応しかできない。その点これら戦車などのいわゆる「通常兵器」は、警棒や投げ縄のようにもう少し柔軟な対応が可能だという点が買われて、立派に生き残ることができたのである。こうした点を重視した核戦略は「柔軟反応戦略」の名で採用された。

逆に言えば、その取り柄である「柔軟性」というものがもし失われるようなことになった場合、通常兵器は核兵器に比べて何も優れた点を持たないことになる。そして現実にはそれは失われていったのである。

極端な話、西側先進国の間でいかに貿易問題などで二国関係が悪化したとしても、貿易赤字国の側が相手側の黒字を消滅させるために相手国の議事堂に戦車で攻め込むなどと真面目に考える者はおるまい。そんな非常識な行動による政府間の信頼関係の破壊の度合は、

いきなり核兵器を一発使用した場合に比べてもそんなに違いがあるわけではない。

実際、それを行ったときに経済システムというものがどれほどの壊滅的打撃を受けるかは想像に難くない。単に株式市場の暴落という問題にとどまらず、現代の金融システムというものがいかに脆い基盤の上に立っているかを考えたとき、先進国間での軍事力の使用というものは、それが核兵器を使おうと使うまいと、破局的だという点でそう大差ないのである。

このように相互の経済依存が大きい西側先進国間では軍事力の使用などということは最初からオプションの中に入っていないわけであるが、一方ソ連側もその戦車部隊をはじめとする通常兵器に柔軟性を与えることにあまり成功せず、したがって西側に対する有効な武器に仕立て上げることができなかった。

なぜならソ連軍は西ヨーロッパでその戦車部隊をどう使うかに際して、結局それを一まとめの大集団として東西の国境から雪崩れ込ませるという方法しか考えることができなかった。そして一方それを迎え撃つ立場のNATO軍は数量的に劣勢である以上、西ヨーロッパに配備されている通常兵器だけでその前進を阻止することは到底不可能と考えられており、侵攻してくるソ連地上軍の頭上に最初から切り札として戦術核兵器を使用することを覚悟せざるを得なかった。そしてそれは必ずソ連側の戦術核兵器の反撃を呼び起こし、最終的には相互の国土や都市に対する破滅的な戦略核兵器の応酬となることが確実だったからである。

こうして双方がジレンマに首までどっぷり浸かってしまい、戦車とICBMの間につながっているエスカレーションの糸をどうしても断ち切ることができなかった。つまり少なくとも西ヨーロッパ正面に関する限り、通常兵器と核兵器は一体化して全く動けない万里の長城のようなものとなってしまい、相手の動きを止める消極的效果はあっても、通常兵力の最大の取り得である柔軟性というものに積極的役割を与えることができなかった。要するにこれが「通常兵器の相対的核兵器化」の現実である。

これらの条件のない場所においては、現代でも戦車などの兵器は一応健在である。つまり砲弾の音に驚いて壊れるほど脆く高度に発達したガラスのような経済システムとは無縁で、またそこでどんな騒動が起こっても核兵器の使用へのエスカレーションが起こらないような場所でありさえすれば、それらの兵器はまだそれなりに使い道がある。現在でも地域紛争で軍事力が盛んに使われている場所というのはそういう条件の満たされている場所である。しかしそうでない場所においては、それらは次第に、以前核兵器がたどったのと同様「使えない力」として抑止力の一部に取り込まれつつあるように思われる。

§ 文明の中のパワーの三つのレベル

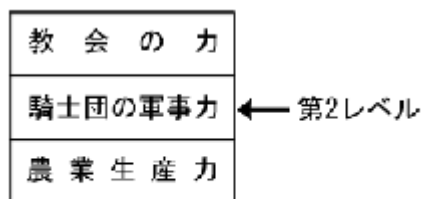
人類の歴史においてこれまで存在していたパワーについても、この「柔軟性」という観点からする分類は可能であるように思われる。要するにただ強いが弱いだけでなく、もう一つ、自由に使いやすいかそうでないかという観点を導入するのである。

例えば農業文明の社会をパワーという観点から見た場合、それは三つのレベルに分かれているように思われる。まず一番下の基盤レベルにあるのは農業生産力である。農業文明においては国の力の強さを決定するのは最終的にはそれであり、農業生産力の劣る国は結局は覇権を握ることはできないだろう。

このように農業は基盤となるパワーではあるが、一方でそれは人間の恣意を容易に受けつけない。その生産を劇的に増大させるには優に一世代ぐらいの時間がかかってしまい、数年後の軍事行動に合わせてそれを二倍にしようとしても、そんな短時間では到底間に合わないのである。つまり非常にゆっくりとしか変化してくれないため、人間が自由に使いこなす道具としては不便なものである。

その一段上のレベルにあるのが封建騎士団からなる軍事力であるが、これは農業のパワーとは対照的に人間の自由意志を極めてよく受け入れる。実際1人の英雄がそれを手にしたとき、自分の意志と能力によって短い生涯のうちに世界を一変させることも決して不可能ではない。確かにその物理的な上限や兵力の規模などは、その基盤である農業生産力によって制約を受けるため、万能というわけでは必ずしもないが、国の指導者が振り回すには最も手頃な重さと敏捷さを持ったパワーであると言える。

そしてさらにその上の最上階のレベルに、その騎士団を律するための宗教のパワーというものが存在する。この宗教というものは、人間の恣意を受けつけないものであってこそ信頼されて、はじめて騎士たちの精神に対する支配力を手にすることができるのである。それが聖職者たちの我欲や恣意の道具に墮落したならば、たちまち影響力を失うことだろう。



1-1図

したがってこの三段階のパワーのうち、人間の自由意志というものがある程度コントロールできるものは、その第二のレベルに位置する軍事力のみだということになる。そして、歴史家や年代記作者が最も情熱をもって記述したがるのも結局はそのレベルで繰り広げられるパワーの争奪や闘争の物語 - -それが栄光の歴史であるか悲劇であるかにかかわりなく - -なのである。

そのように三段階に分ける見方は現代においてもやや似たものが可能である。今世紀半ばまでは、国家の経済力というものは農業と同じく、歴史を動かすための最も基本的なパワーであるとは考えられていたが、それはあくまでも軍事力の基盤としての重要性に過ぎ

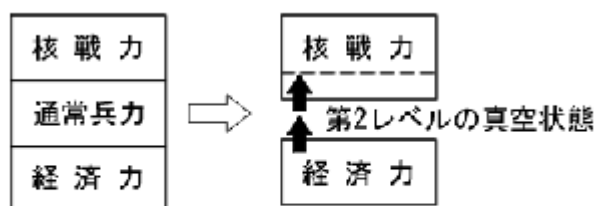
なかった。つまりこの分類では一番下のレベルに位置を占めていたのであり、歴史が第一に記述すべきものはやはり第二レベルで展開される軍事部門の物語だったのである。

ところが核兵器の登場によって、最上階のレベルのパワーが新しく誕生する。これら核兵器というものはもはや人間が道具として使いこなせる限界を超えてしまった。そのため人類は、地上に君臨して人間の自由意志を受けつけないこの兵器を一旦、破壊の神の神殿に奉納し、抑止力という形でこの破壊の神をなだめたりおだてたりすることでしか自分の力にすることはできなかった。

そのままいけば、下から上へ向かって経済力、通常兵力、核兵力という三段階の序列ができてその状態が長く続いたかもしれない。しかし現実にはその中央のレベルにあったはずの通常兵力というものが、柔軟性の不足によって相対的に核兵器化し、一番上のレベルに仲間入りしてしまったのである。

それによって第二番目のレベルが空白になったことは、恐らく後世の年代記者たちに書くべき物語を提供しなかったという点で彼らの頭を抱えさせるに違いないが、しかし人間社会や文明というものは何らかの形でそのような真空を埋めようとする本能をもっているものである。

そしてここにおいて誰の目にも明らかになったのは、それまで一番下のレベルに位置を占めていた経済力やメディアの力の中の一部が、いわば格上げされる形で第二番目の領域の真空状態を埋めつつあるということである。



1-2図

§ 全員参加型への復帰

このため20世紀を生きる一般市民たちは、戦争ゲームのプレーヤーと傍観者の間を忙しげに行ったり来たりする羽目に陥ったようである。第二次大戦が終わって巨大な軍隊の動員が解除され、徴兵制度が廃止されるにつれ、戦争は一部の職業軍人や専門家だけが行うものとなり、西側諸国の一般市民にとって戦争は別世界の出来事となった。

ある意味で世界は18世紀のフランス革命以前の状態に戻ったのである。フランス革命以前のヨーロッパの軍隊というのは、本質的に職業軍人の世界であり、徴兵による国民軍ではなかった。それは貴族出身の将校と金で雇った傭兵からなる軍隊であり、民衆とはある程度無関係な場所で戦っていたのである。

そのためこの時代の戦争には奇妙な優雅さがあり、例えばお天気の悪い日は戦争も休みで、そんな日には敵味方の将校が一緒にお茶を飲むなどということがしばしば行われ、また金のかかる傭兵をむやみに消耗することを双方が嫌って、ただ敵が後へ回ったというだ

けでそこから先の戦闘を打ち切ってしまうなどということも珍しくなかった。そして民衆にとって戦争の恐怖があるとすればそれはむしろ飢餓や重税の恐怖であり、戦闘そのものによって民衆が死ぬなどということはむしろ稀だった。

ところがフランス革命によって徴兵制度というものが導入されたことで、戦争のルールは全員参加を前提とするものになってしまう。その結果戦争は、国民の誰一人としてそこから逃れられない苛烈で悲惨なゲームとなっていった。前時代の貴族軍人がたとえどれほど以前のやり方に郷愁を抱こうと、国民皆兵制度の巨大なマンパワーを前にしてはそれに押し流される以外になかったのである。

今から見るとこんな苛烈な制度に国民が耐えられたのは不思議な気もするが、とにかくこの体制は第一次および第二次大戦の時期まで続くことになる。しかし第二次大戦を過ぎたあたりから様相は微妙な変化を示すようになる。それは、徴兵によって集めた大量の素人兵士よりも、金で買った高度なハイテク兵器のほうが働きがよくなってきたことである。そのため一見したところ現代社会の状態はある点でむしろ昔の傭兵の時代に似てきたと言えなくもない。実際、背後の国民大衆というものは、核兵器の人質にとられているという点を除けば軍事専門家たちとは全く別の世界を生きており、双方が同じゲームに参加しているという意識はほとんどないのである。

ところがそれは必ずしも市民たちに闘争からの解放をもたらしはしなかった。近代以前の伝統社会の牧歌的な経済においては、なるほど天候不順による凶作の恐怖にしばしば脅かされはしたものの、経済活動そのものが一種の戦争であるという感想を抱いた人は少なかったろう。しかし近代資本主義の弱肉強食の苛烈な世界は、そこを生き抜くすべての人が大なり小なり戦争との類似を感じとるであろうし、また時を追うごとにそこへの参加に対する強制力は強くなっていく。それを拒んだ国は第三世界化への転落を受け入れねばなるまい。

要するに第二次大戦後に一旦戦争は全員参加のゲームではなくなったのだが、それらが相対的核兵器化によってまとめて一段上のレベルに上って行ってしまった。その真空状態を埋めたのが、苛烈化した近代経済だったのだが、それが全員参加型のものだったため、いつの間にか世界全体の戦争ゲームが再び第一次および第二次大戦と同様の全員参加型に戻ってしまっているというわけである。

このようにして作られた舞台装置が、現在われわれの目の前に広がっていることになる。つまり「通常兵器の相対的核兵器化」によって力を失った軍事力の真空状態を埋める格好で、経済力やメディアのパワーが世界史の主演となる「パワーの無形化」という文明史上の大変化が到来し、そしてそれは市民が全員参加を強要される、一種の無形化された大戦争になりつつあるということである。

それでは次に、この人類がかつて体験したことのない「パワーの無形化」という新しい世界に足を踏み入れるに当たって、何か指導原理となるものを探してみよう。